
映 像 民 俗

日本映像民俗学の会 第24回大会報告

恒例の大会が3月2日、3日の2日間に渡って、松本青人会員のお世話で、「長野民俗の会」の協賛で開催された。映像を観るだけでなく、映像の対象とした地域の民俗の現在と照らし合わせておこなわれたことが目新しい試みであった。

過去を過去としてみるのではなく、「過去」を「現在」としてみるのが民俗学であるならば、映像民俗学は、過去が目の前で生きて展開するがゆえに、なお一層、過去を現在として認識できるものである。

大会の内容は、1 野田真吉が撮った伊那谷の作品の上映会、2 北信、中信の映像の発掘、3 討論会；映像民俗～私の方法・私の見方～の3点であった。

初日は40数名の参加、二日目も25人の参加者で映像と議論が盛り上がった。以下、日程と次第を記します。

日本映像民俗学の会 第24回大会

協 賛 長野県民俗の会
 期 間 2002年3月2・3日
 場 所 長野市勤労者福祉センター/ 第一会議室
 〒380-0846 長野市旭町1108 電話：0262-33-3231

プログラム

3月2日(土)

野田真吉 信濃の映像民俗特集 【10:00～12:00】

司会・進行 大塚正之

東北の祭 第3部 小正月の行事 (1957) 20分

冬の夜の神々の宴 遠山の霜月祭り (1970) 45分

新野の門松づくり (1975) 8分

生者と死者のかよい路 新野の盆踊り・神送りの行事 (1991) 36分

映像が見た信濃の民俗と現在 【13:00～18:30】

司会・進行 大森康弘+牛島 巖

・亀井文夫『小林一茶』(1941) 30分

コメンテーター：間宮則夫(映像民俗学の会)

・京極高英『子供の四季』(1958) 岩波映画 30分

コメンテーター：田澤直人(長野県民俗の会)

・羽田澄子『信濃の自然とまつり』(1979) 岩波映画 30分

コメンテーター：巻山圭一(長野県民俗の会)

・北村皆雄『諏訪の御柱』(1992) 諏訪市博物館・ヴィジュアルフォークロア 60分

コメンテーター：高見俊樹(諏訪市博物館)

・長野市視聴覚センター『賽の神』(1986) 長野市視聴覚センター 30分

コメンテーター：松本清人(長野県民俗の会・映像民俗学の会)

・松本清人『松代柴の道祖神祭り』(2002) 15分

コメンテーター：松本清人(長野県民俗の会・映像民俗学の会)

懇親会 常智院(長野市元善光寺) 【19:00～21:00】

3月3日(日)

映像民俗学の会 総会 【9:00～10:00】

司会：松島岳生

会員作品上映 + 映像民俗 - 私の方法・私の見方 - 【10:00～16:30】

1 北と南の民俗 司会・進行：吉松安弘

安部武司 ビデオ：「第24回 北上みちのく芸能まつり」 30分

発表：テレビ番組の民俗芸能 15分

諸岡青人 ビデオ：「虫送り」 16分

発表：民俗行事の再現記録について 15分

新里光宏 ビデオ&発表：「島語り島の声～ユークイ2001～」 45分

コメンテーター：北村皆雄

2 記録と保存を語る 司会・進行：亘 純吉 【13:15～14:15】

孝寿 聡：無形文化の記録と保存～映像記録の可能性と不可能性

岡田一男：エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを検討する(1952-2002)

コメンテーター：牛島巖

- 3 研究者にとって映像とは何か 司会・進行：牛島 巖 【14:25～17:00】
小林忠雄 ビデオ&発表：「奥能登のあえのこと」映画（60分）+発表（15分）
蛸島 直 ビデオ&発表
「フィールドノートとしてのビデオカメラ：台湾先住民の調査から」
長島節五 ビデオ&発表：「修験山伏の現在」
コメンテーター：鈴木岳海+討論 （20分）

特集 総会報告

野田真吉 信濃の映像民俗特集

大塚 正之

「日本映像民俗学の会」第24回大会を長野市で開催するにあたって、この会の発起人の一人であった故、野田真吉が製作した長野県に関連した作品を記念上映した。当日は上映開始が午前10時という早い時間にも関わらず、会員、非会員を合わせて参加者は四十数名を数えた。司会の大塚正之が上映にあたって以下のような、簡単な作品プロフィールを紹介した。

「東北のまつり第3部 小正月の行事」1957年 20分

「東北のまつり」3部作として新潟県直江津市西横山における小正月の一連の行事、山形県西川町間沢の「お田植」の行事、秋田県横手市の「ぼんでんまつり」を記録した作品。

野田真吉は自らが演出した「東北のまつり」3部作のうち、この第3部のプリントだけを手元に置いて寵愛していた。ドキュメンタリーと民俗学とを結びつけた野田真吉の民俗学ドキュメンタリーの原点とも言える作品。

「冬の夜の神々の宴 遠山の霜月祭り」1970年 30分

長野県下伊那郡上村下栗に伝承されている「霜月まつり」を素材にした作品。

仮面の舞による呪術的神事を民俗学的学問の対象としてではなく、一夜の夢幻として描いた一篇の映像詩。

長谷川元吉のナイーブで思い切りのいい主体的なカメラワークと、野田真吉の斬新で卓越したモンタージュが創り出したドキュメンタリーの金字塔。

「新野の門松づくり」1975年 5分

長野県下伊那郡阿南町新野に行われている民俗行事「雪まつり」の際に、新野の人たちが作る門松づくりを記録した作品。

新野の雪まつりを取材して行く中で見つけ、撮影した門松づくりではあったが、後年製作した「雪ははなである - 新野の雪まつり」には組み入れず、独立させて完成した作品。

「生者と死者のかよい路 - 新野の盆おどり・神送りの行事」1991年 36分

長野県下伊那郡阿南町新野で旧盆の3日間、夜を徹して行われている「新野の盆おどり」と、その最後を飾る行事「神送りの行事」に焦点をあてて記録した作品。年に一度他界にいる祖霊を迎え、日頃の加護に感謝をこめてにぎやかにもてなし、翌年の盆での再会を誓って他界に送り返す祖霊信仰をとおして、目に見えるはずのない祖霊と町の人たちとの心の交流を描く。

遺作となったこの作品で野田真吉は、民俗事象と映像作家との距離感 - 映像作家にとって民俗行事をどう捉えるか - を明快に提示しながら、生きている人たちが抱いている死者への追慕の尊さ、そして生とは何か、死とは何かを考えさせている。

映像が見た信濃の民俗と現在

牛島 巖

初日、午後の「映像が見た信濃の民俗と現在」の部では、北信・中信の映像特集を意図した。だが、信州を記録した映像を概観すると、野田真吉の作品を含めて南信（伊那谷など）の花祭、霜月祭、盆踊りなどを描いた作品群に偏っていて、諏訪の御柱は除くと北信、中信の映像は意外に少ない。今回はその発掘をしてみようと、探索したが、観光映画の域を抜けた作品は少なかった。だが、それを補う形で、長野県民俗の会の方々から、現在の民俗との関わりを解題して頂いたのが今回の成果であった。

亀井文夫の信州風土記三部作の一つ「小林一茶」は1941年（昭和16年）に制作された。60年前の信濃の風土と農民の生活の関係を捉えた作品。姨捨の棚田に象徴される山頂まで田畑を拓く農民、後上人様のお数珠を受ける善光寺参詣の婦人たちの顔、戸隠高原に見る山間部のやせ地や荒地でそば耕作に勤しむ人々、春を迎えて野天風呂に湯治する老人、霜害冷害で全滅した桑畑に立ち働く百姓の姿などの映像で展開される作品に、情緒的ではあるが、当時の日常的な農民の生活が捉えられていた。そこに作家亀井の眼差しを見た。

岩波映画と長野県教育委員会が、所得倍増政策が始まる頃（1958 昭和38年）に、南佐久郡で制作した「子供の四季」は期待を越える作品であった。山村における子供組の行事、かかしまつり、獅子舞の門付け、どんど焼き、初午などを記録した映像。映像が記録された川上村で教える田澤直人氏（長野県民俗の会）から、子供組

に関する調査報告書にあわせて、この作品が制作されたという経緯があったことを聞いた。文献とセットで制作された映像は少なく、今生きている村人の記憶を引き出すきっかけにも利用でき、とりわけ貴重な記録といえよう。

同じ岩波の「信濃の自然とまつり」(1979)は、大町の流鏝馬、諏訪の遷宮祭、木曾の花馬まつり、遠山の霜月祭りなど、信濃で有名な祭りを紹介しているが、観光映画の域を越えた作品ではなかった。だが、この作品を丁寧に解説してくれた巻山圭一氏(長野県民俗の会)は、これらの有名な祭りの周辺には、同様な系統の祭りが存在していることに触れ、それらを丁寧に調査する意義を指摘された。北村氏の「諏訪の御柱」は、諏訪市博物館での研究・知見を踏まえて、御柱の祭暦の始まりから、一連の神事・行事の全容を記録し、合わせてアジアの柱立て祭りにふれた作品。諏訪の御柱祭りを総合的に記録した力作である。しかし、この手法の作品では、不特定の参加者の姿態は浮き彫りされにくい。

信州各地には、どんど焼き系の子供の小正月行事が残っているが、地元の松本清人氏が紹介してくれたのは、長野市視聴覚センター制作の「賽の神」(1968)と松本氏が本年制作した「松代柴の道祖神祭り」であった。いずれも地元の民俗学者の手によって報告されている事例である。現に行われている行事を、地元研究者が自らビデオ撮影する運動の広がりを期待したい。

(3月22日記)

亀井文夫について

間宮 則夫

『小林一茶』について詳しい作品解説は、お渡しした資料を読んでいただくとして、ここでは、亀井文夫は『小林一茶』以外にどんな作品を作ってきたのかを、年代を追って簡単に紹介していきたいと思います。

・亀井文夫は1908年(明治41年)福島県に生まれました。はじめ画家をめざして文化学院の芸術科に入学。しかし在学中に社会科学に関心を持ち、ロシア美術の研究を思い立って1928年ロシアに渡りました。

しかし革命後の硬直したロシアの絵画に失望したこと。また革命後の新しく力強い映画に接して、改めて映画の道を志してレニングラードの映画専門学校に留学。

しかし留学3年目で結核を患い、帰国する羽目になりました。

・2年後、結核が癒えて再びロシア留学を目指して上京したところ、たまたま友人に薦められて1933年PCL、後の東宝映画に入社して映画人生が始まったと、亀井文夫と最も交友の深かった野田真吉は、著書『日本ドキュメンタリー映画全史』のなかで紹介しています。

・1938年に第1作目に、新鋭巡洋艦「足柄」による英国皇帝戴冠式参列とドイツ訪問の記録映画「怒涛を蹴って」の構成編集をおこなっています。(撮影は『小林一茶』と同じカメラマンの白井茂)

・1937年、『上海』『北京』『支那事変』を構成編集(撮影 三木茂)、『上海』は海軍省後援によるもので、いわゆる上海事変といわれた日中激突直後の上海及びその近郊の戦場跡の様子を撮影したもので、後の『戦う兵隊』とともにヒューマニズムの視点から戦争を捉えたものです。きびしい軍の干渉を避けるように、随所に屈折した間接的な表現ですがヒューマンな主張を貫いていると評価された作品です。

・1938年、『戦う兵隊』を監督(撮影 三木茂)この作品は陸軍省の後援で、ようやく日中戦争が泥沼化の様相を見せ始めた頃の武漢攻略作戦のきびしい戦場の様子を描いたものです。しかしそこには華々しい戦闘の場面はありません。

『戦う兵隊』の製作意図について監督は1958年に雑誌『記録映画』の中で「ただヒューマンな眼で戦場のスケッチを集積しただけ」と語っています。そして彼は更に次のように語っています。「野中の白いまっすぐな遠い一本道。人ひとりいない寂寥。日本軍が前進して行ったあと、行軍に耐えられなくなったため捨てていかれた病気の廃馬がたった一匹、動くことも出来ずに立ちつくしている。こんな情景にぶつつかるとカメラを向けずにはいられなくなったから、僕はこれを撮したのだ。撮しているうちに馬は古木がくずれおちるように倒れ、荒々しい息使いを最後に死んでゆく。僕にとってはもはや人間と馬との区別などは全くなくなる。ただそこにあるのは戦争と生命の悲痛な関係の実証だけだ。」と対象への視点を述べています。

しかし『戦う兵隊』は厭戦的な要素が濃厚であるとされて、軍当局によって公開禁止とされてしまいました。

・この頃(1940年)戦時体制の強化のため「映画法」が制定され検閲など文化統制が益々きびしくなってきました。そうした戦時状況の流れの中で、1940年に企画されたのが『信濃風土記』です。その当時出された雑誌「文化映画研究」の座談会で亀井文夫は次のように映画づくりの姿勢について語っています。

文化映画は真理の探究を目的とするもので、素材をとりあつかう態度は科学的でなければならない。

神秘主義は文化映画ではない。神秘主義映画というのは真理を大衆の眼から覆いかくすもの。

・『信濃風土記』も神秘主義を排した科学的な視点をもって製作に臨んだと思われます。『信濃風土記』ははじめ7巻の長編ドキュメンタリーを考えていたようですが、配給の都合で第一部『伊奈節』第二部『小林一茶』第三部『町と農村』の三つの短編に分けられたようです。当時の雑誌「文化映画研究」に発表した亀井文夫の『信濃風土記』製作の動機によると、

- ・1940年に作られた第一部『伊奈節』では民謡の道をたどりながら、文化の変遷と農政の史を語ろうとし、
- ・翌1941年に作られた第二部『小林一茶』では、長野県の風土はどんな農業を生み、どんな人間と心をつくりあげてきたか、長野県の風土と生活との関係を描こうとし
- ・第三部『町と農村』では、農本自治を目指して、新日本農村建設に努力している郷土の人々とその進む途

を紹介しようとした、と記しています。

- ・しかし『小林一茶』を作り終えるとすぐ1941年10月、治安維持法違反容疑で検挙、拘留され、結局第三部『町と農村』は製作されなかったようです。1年後拘留所より出所して東宝から日本ニュースの日本映画社に移り、敗戦をむかえます。
- ・1946年戦後いち早く製作活動を再開した亀井文夫は天皇の戦争責任を追求した『日本の悲劇』という長編記録映画を構成編集。しかし戦争政策に反するとされ、米軍により公開禁止とされ、作品は没収されてしまいました。
- ・1947～58年まではもっぱら劇映画を演出。『戦争と平和』『女の一生』『無頼漢長兵衛』『母なれば女なれば』『女ひとり大地を行く』などの作品があります。
- ・1953年『基地の子』で、再びドキュメンタリーをはじめます。
- ・1954年、日本ドキュメンタリー・フィルム社を設立。以後そこを拠点に創作活動をおこなっていきます。
- ・1956年、東京・立川市近郊の基地反対闘争の記録『流血の記録・砂川』8部作を製作。同じく56年に広島原爆の被爆者問題をヒューマンな視点から捉えた『生きていてよかった』を製作。
- ・1957年、同じく原爆を科学の視点から捉えた『世界は恐怖する』を製作。
- ・1960年差別問題を取りあげた『人間みな兄弟・部落差別の記録』を製作するなど、常にアクチュアルな問題を取りあげ、精神的に作品活動を続けた。しかしそのあとPR映画を2～3本作った後、映画製作を中断。
- ・1987年、映画製作を再開。『生物みなトモダチノトリ・ムシ・サカナの子守唄』を完成させ
- ・1988年2月、不帰の客となる。
- ・個々の作品の評価については各人それぞれあると思われるが、全作品を通して見たとき、まぎれもなく日本の映画界においてユニークな存在であったとともに、最もすぐれたドキュメンタリー作家であったと、私は思っています。

以上

(本稿は長野大会での亀井文夫の紹介メモに若干の補足を加えたものです。)

「島語り島の声～ユークイ 2001～」

新里 光弘(新会員)

1 伊良部島の概要

行事の行われた佐良浜(さらはま)の説明

佐良浜は、宮古本島の北西に位置する伊良部島の中にあります。島は、この伊良部島と橋で結ばれる隣の下地島を合わせ伊良部町という一つの行政区を成しています。伊良部島は、大きく分けて北区と南区に分かれます。

女性だけの祭祀「ユークイ」の行われる佐良浜は、地元では北区にあります。この集落は、280年前に池間島から分村し、現在世帯数1392、人口が3939人です。(2002年2月末現在)

2 ユークイ行事について

池間島から分村したのにあわせ池間島の御嶽(ウタキ)*を中心とする行事もそのまま佐良浜に引き継がれたものと思われます。

*御嶽(ウタキ)は、集落の繁栄に功績のあった英雄神を祀った所や農耕神を祀った所など色々ありますが御嶽研究で知られる元琉球大学教授の仲松弥秀氏によりますと御嶽は、集落の発生或いは、集落を創世した人達が眠る空間=つまり「風葬地」が本来の御嶽の形態であるとされます。従いまして池間島のウハルズ御嶽は、風葬地と考えられますが、伊良部島に分村した佐良浜のウハルズ御嶽は、池間島を遙拝する機能を持っていると考えられます。

佐良浜では、そのウハルズ御嶽を中心に年間さまざまな祭祀行事が展開されます。

資料1をご覧ください。これは、池間島の祭祀行事の一覧表です。資料2は、分村した佐良浜の祭祀行事の一覧表です。二つの資料に沿って話をしますとまず佐良浜の行事表は、詳細に記されていますが池間島の表は、集落=村レベルの行事が中心にまとめられています。しかしこの中には佐良浜にあるような細かい1月初めの「一日ニガイ」などあります。

この二つの資料を対比しますと行事の始めに村レベルで集落民の健康を祈る「マビトダミニガイ」でスタートしています。以下少しずつ行事に異なりが見られます。これは、分村した当時からそうだったのか、又はいつ頃から変遷したのかわかりませんが変化が見られます。特に資料2の佐良浜の行事一覧表をご覧ください。後半旧暦九月にある「マキニガイ」や「伊良部ヒヤーズニガイ」は、伊良部島の気高い神が鎮座する御嶽の神様を祈っています。これは池間島と佐良浜の大きな違いです。

従って佐良浜の祭祀は、池間島を基盤として移住地の伊良部島の祭祀も取り入れながら複合的にオリジナル化したものであると考えられます。

「ユークイ」は、旧暦九月の子(ね)の日に行われます。番組で取り上げました「ユークイ」は、親島に当たる池間島の方では、神役が揃わないために休止したり再開したり変遷が見られます。しかし分村した佐良浜と宮古本島の西原(平良市西原)では、今でも行われています。しかし時代の流れの中で行事を担う女性達が少なくなっていくという状況はどことも同じようです。

3 南島の精神世界にどのように迫ったか

琉球列島とりわけ宮古諸島には、多くの祭祀行事があります。なぜこのような急速な時間の流れの中で祭祀

行事が残っている。その要因の一つとして暮らしと行事が密接に関わっているという事です。次にタブー性が生きていているという事です。

例えば時期によって御嶽の中に入ってはいけない。仮に入ると健康を害するとか云われます。そのような事が今でも言い伝えとして生きている事が今でも祭祀が継承されている要因と考えられます。

「ユークイ」の場合正面から神役の女性を見てはいけない。「見たら死んでしまう」という事が言い伝えとして残っています。

しかし近年は、さまざまなメディアがこの世界に目を向けるようになりこのタブー性が薄れつつあります。私はこのタブー性を生かす事で行事の持つ意味に迫れないかと考えて撮影をするよう心がけています。もちろん祭祀行事を執り行う人達(神役の方々)との信頼関係を築く事が大前提です。その方々が大切にしている事と同じ目線に立って大切に。取らせて頂くという姿勢。ちなみに私は、このような祭祀行事が残る宮古島の北端、狩俣(かりまた)という地で生まれ育ったため幼い頃からこのタブー性が自然と身に付いているのかもしれませんが。

新里さんは、宮古島のテレビ局で活動しております。

下記のような、いくつかの作品が入賞しております。

- ・97年3月NHK放送研修センター主催
第3回ケーブルテレビ自主制作番組コンテスト
「島 豊饒の時~島人の心と文化」優秀賞
- ・97年6月日本ケーブルテレビ連盟主催
第23回「日本ケーブルテレビ大賞」番組コンクール
「島語り 島の声」最優秀賞
- ・97年9月「地方の時代映像祭」実行委員会 神奈川県・川崎市など主催
「ツカサダーからの便り~琉球弧・祈りの道」優秀賞
- ・99年3月NHK放送研修センター主催
第5回ケーブルテレビ自主制作番組コンテスト
「帰郷~マヤクツツに集う人々~」奨励賞

北と南の民俗

北村 皆雄

吉松安弘さんの司会で、会員3人の作品が上映され制作者それぞれの発言があった。

上映作品は、安部武司「第24回 北上みちのく芸能まつり」(30分) 諸岡青人「虫送り」(16分) 新里光宏「島語り島の声~ユークイ2001~」(45分)であった。

三作品に共通するところは、消えるもの・消える可能性のあるものをカメラで映像として記録したところにある。

諸岡さんの作品は、一つの村にかかってあって今は消えている「虫送り」という民俗行事を、映画として記録するという行為のなかで復活させたものである。もし、再び行事が消えてしまっても、映像として記録しておけば、いつかは復活可能であろうと、80才の執念で撮ったものである。民俗行事にカメラというものがかわることの意味がこめられた作品である。

安部さんのテレビ作品は、民俗芸能という、本来が地域の土に結びついているべきはずの民俗芸能が、イベント化され観光行事になっているということをつえている。それは、嘆かわしいと思う以上に、こうしたイベント的行事によって、地域の民俗芸能が担い手たちの励みとなって活性化しているという、皮肉な現象を生んでいるのである。残念ながら作品の内容は、そこまで言及し得ていなかったが、民俗芸能の保存、継承を考えるのに、よいきっかけを与えてくれるものであった。

新里さんのユークイの作品は、4年ぶりに復活した祭りを、復活する以前の記録を交えながら、丁寧なえがいたものである。新会員になった新里さんの作品を見るのは初めてだったが、生まれ島の宮古を、内側から描いたという点で、特筆すべき作品であるように思った。私も、36,7年前から沖縄に関わり映像を作ってきたが、私どもの「旅人の眼」で捉える民俗行事ではなく、そこに生活するものが「内側の眼」から映像を手がける作家が、宮古島に出てきたことを喜びたい。彼は民放の映像賞をとっている。

記録と保存を語る

亘 純吉

記録と保存については、過去の総会や発表で、映像の記録のあり方、特に作家性と記録について議論がなされてきた。今回の本セッションは、この流れを受け孝寿、岡田両氏が問題を提起し、それを受けて牛島氏がコメントを加え、問題に関する議論を展開した。

- ・何を記録してき、何を記録して行くのか

映画やビデオは、ある時間の光の像を工学的に分解し、視覚効果によって再現するものであること認識することの大切さを再検討した。映画フィルムは、1秒を24コマに分割した画像を連続して映し出すことによって、私たちの目に映像として結ぶ。近年のデジタル技術は、この1コマを構成する光の素を加工することを可能にした。映像

は、創造性を手に入れる同時に映像記録性を根底から問いだしている。

・映像を検証する姿勢

文字を核とする記録の世界では、文献検証は資料 / 史料は論を構成していく際に重要な位置をしめ、それ自体独立した研究分野を形づくっている。映像についても、「映像検証」を確立していく必要性がある。とくに、デジタル技術による映像の加工は、製作者の恣意性が入り込む余地があり、社会的、政治的、文化的な問題を内包している。

・映像の保存と利用

映像の原版 / ネガなどは、映像検証を可能とするためには保存が必要であり、デジタル化のみが保存記録ではない。と同時にビデオ録画の記録性について再考することが必要である。

映像資料の作成と利用について「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」を事例に、映像資料の共有と利用のあり方、とくに多様な情報をふくむ映像を利用の観点からどのようにインデックスをつけるか問題となることを認識した。このことは、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカの運営が行き詰まった要因の一つでもある。

・記録すること、保存すること

「何を記録してき、何を記録して行くのか」は、私たちの「生きざま」「文化」を語り続けることにも等しい。ある明確な意図をもった価値観が席卷するグローバル化とは何かを再考することでもある。

研究者にとって映像とは何か

間宮 則夫

2日目の第3テーマは、14時25分からはじまった。報告者は小林忠雄、蛸島 直、長島節五の三氏。そしてコメンテーターとして鈴木岳海が加わる。以下私の私見を交えて作品の紹介と感想をもって報告としたいと思う。

まず小林忠雄作、映画「奥能登のあえのこと」(60分)について。作者の小林さんは、先年、信州戸隠でおこなった第21回大会で「風の盆ふいーりんぐ - 越中八尾マチ場民俗誌」という映像作品を発表している。<伝統的な地方都市であるマチ場に、数百年にわたり培ってきた、色彩や音、におい、味覚、触覚の、五感の民俗文化を取り出そうとした...>とシナリオで製作意図について語っている。そのとき私はこの繊細で華麗な映像に強く心を惹かれたのをおぼえている。

北陸を足場とした、小林さんの研究映像活動は活発で、この「風の盆ふいーりんぐ - 」以前にも加賀・能登地方を中心に数本の研究映像作品を製作している。今回出品の映画「あえのこと」もその一つであり、1983年に製作されたものである。

アエノコトというのは奥能登地方(石川県鳳至郡・珠洲郡)に伝わる豊年感謝と予祝の農耕儀礼で、天皇家が累代受け継いでいる新嘗(大嘗)祭と同じ意味の儀礼といわれている。地方では一般的に「タノカンサア」と呼ばれ、稲の収穫を終えた新暦12月5日に男女二神の田の神を迎え入れ、風呂に案内し、暖かに燃える囲炉裏の座敷でくつろいでもらう。そして主人は田の神に対する膳に盛られた御馳走について紹介し召し上がっていただく。こうして田の神には供えられた種籾俵で、翌年の2月9日の「田の神送り」までゆっくりと過ごしていただく。いわば神と農民との温かい交わりを現した厳粛な行事ともいえよう。

小林さんの映像はこのアエノコト行事の進行を忠実に情感豊かに捉えている。そして学術資料としてのみではなく、米づくり農業に対する日本人の<執着>のようなものがじんわりと伝わってくる映像作品であった。

「フィールドノートとしてのビデオカメラ：台湾先住民の調査から」について

蛸島さんは、1986年から台湾先住民のプوما族を対象に調査研究をおこなっており、このうち1988年の収穫際調査から8ミリビデオでの記録を開始。以後現在まで、フィールドワークの補助手段として映像を重視して、これまで、「病根を取る - プوما族の対邪術儀礼 - 」(第13回総会1991年)、「ティナバワンを呼び戻す - プوما族の治療儀礼」(第14回総会1992年)、「プوما族のドゥマワツ儀礼」(第15回総会1993年)、「プوما族の浄化儀礼: サマブサップ」(第16回総会1994年)、「ブランコを建てる - プوما族の収穫祭 - 」(第17回総会1995年)、「お守りを作る - プوما族のプルウム儀礼 - 」(第18回総会1996年)、「プوما族の雨乞い儀礼」(第20回総会1998年)等々の研究成果を発表してこられた(第24回総会 蛸島レジュメ)。そして年をおうごとにカメラワークはスムーズにかつ的確になりフィールドワークの手段として着実に定着している様子や活用状況がわかって興味深い報告であった。

カメラのデジタル化は機能向上とコンパクト化を呼び、研究者にとってより一層利用価値が高まってきた。いまやデジタルカメラは効率的な映像の記録手段としてのみではなく、更にオーディオ面においてもビデオ / オーディオとして(例えば、クローズアップされた口元を見れば言葉もわかりやすいなど)活用するなど、その用途は多角的である - と自作の4つのシーケンスを展開させながらの貴重な体験報告であった。

「修験山伏の現在」(29分)について

長島さんの「修験山伏の現在」は、日光修験系の寺社に断片的に残されている各行事を丹念に集めて時系列的に並べ、修験山伏の現状を紹介している。本来は「即身成仏」を目的として山岳修行をする修験山伏。だが現状はそうもいかないようだ。そのことについて長島さんは『かつて修験山伏の修行は山伏法印といわれた宗教家やそれを目指した人のものであったが、現在は日曜画家という言葉があるように、本業の勤めとは別に休日や休暇を利用して、自己鍛錬の為などに修行や行事に参加する人々が主だっている様に見受けられる』と述べている。

ところで作品の内容は以下のように展開する。1月14日神の依代である御幣づくり。小正月の柴燈護摩供。天下泰平、五穀豊饒、家内安全を祈願する(日光市興雲律院)2月上旬、妙見菩薩を祀る星供。護摩壇に燈された沢山のローソクは北極星を中心とする妙見菩薩の曼荼羅を現すという(鹿沼市山王院)9月上旬、秋峰の行は<死と再生>

つまり一度死んで生まれ変わる十界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・声聞・縁覚・菩薩・仏）の修行であり、山伏修行のなかでも最も重要な行だとされている。行はまず、白布でおおわれた母親の胎内に擬された内陣の中に入り、自分自身の甲い、逆修をおこなう。両親の生命の根元に見立てたアカの水を汲み、新たな生命が母胎に宿る。やがて生命は十界の行を修め、成長をとげていく。この＜死と再生＞は秘儀であり、カメラなど踏み込むことのできない聖域である。長島さんと日光修験の関係の深さを示しているとともに、映像記録の方法、姿勢についての貴重な示唆を与えていると思われる。『母の胎内で生育する様をもどき、山歩きの苦しさは母の産みの苦しき陣痛を表す...』と長島さんが言う深夜の山駆けは合憎の雨、苦しさも倍加される。しかし、それが逆に幻想的な光景となって、まさに母親の胎内のイメージを醸し出しているようだ。そして次に火のイメージが展開する。＜水と火＞の衝突。おそらく新しい生命の誕生を意味するであろう燃えさかる＜炎＞が印象的であった。

最後にコメンテーターの鈴木岳海さんから前三者の作品と報告、そして自身の体験を踏まえてのコメントがあった。そのなかで台湾先住民の家庭におけるエピソードが特に私には印象深かった。

映像と先住民の関係について、鈴木さんが先住民の家を訪れたとき、そこに飾られてあった民族衣装姿の家族の記念写真を見て、そこに＜民族のアイデンティティ＞を見出したこと。さらにこうした映像による記録的な保存は、（既に絶えてしまった）昔の古い文化の復興にとっても貴重な資料となる - などフィールドワークでの具体例を語りながら＜記録と表現＞について語った。会場の時間切れで議論は深まらなかったが、＜記録と表現＞は当会の基本的な重要課題で、これからも折にふれて討議していく必要があると思われる。（文責 間宮則夫）

映像民俗学の会 総会報告

総会は、午前9時から、勤労センターの会議室にて、松島岳生さんの司会によって進められた。

全会員71名のうち参加者23名、以下のメンバーであった。

芥川隆信、安部武司、牛島巖、梅本史郎、大久達之助、大塚正之、岡田一男、北村皆雄、君ヶ袋光胤、孝寿 聡、小林忠雄、桜庭美保、鈴木岳海、新里光宏、蛸島 直、辻野理花、長島節五、松本清人、松島岳生、間宮則夫、諸岡青人、吉松安弘、巨純吉

大森康宏（初日参加、所用のため総会欠席）委任状16名、電話連絡による委任10名であった。

- 1 各センターによる報告では、東北センターが唯一の出席者である安部武司さんから発言があったが、メンバーが地域的にも離れていることや会員が少ないことなどから、十分コミュニケーションがとれているようではなかった。センターとしてどうするか検討が迫られているように思う。

関西センターからは、大森さんが所用のため参加できなかったため、主要メンバーを欠くことになった。風邪のため不参加になった康 浩郎さんから事務局宛に来年度は研究会を3回ほどやりたいという連絡があった。

東京センターは、大塚正之さんから亀井文夫作品、牛島巖解説「英国の映像民族誌を観る」の研究会などおこなった。参加者も非会員など増えてきたことが報告された。

- 2 牛島代表より、以下の提案があり、承認された。

- 1) 年一度の集会を、今後大会と称する。会員の議事を総会と呼称する。了承された。

- 2) 会員資格について、会員は「会の目的に賛同し、年会費2,500円を前納する」と会則に記載されているが、当面の運用にあたっては、

現在、会員名簿掲載の者（71名）で、退会を申し出た者、3年以上音信不通の者は、原則として会員名簿から抹消することにしたい。会は、一つの方向を目指すというより、緩やかなつながりを持った運動体ではないか、と提案された。

会費は、原則として毎年大会時に徴収する。大会欠席者に対しては、年1度当年度の会費支払い依頼を、振替用紙を添付して通知することにしたい。会の性質、活動内容（定期刊行物を出していないこと、会費の大半は大会費が占めることなど）から見て、会費の納入のみを成員権の絶対条件にするのは、当面のところなじまないのではないかと提案された。

、とも了承された。

- 3 次回の大会は、25周年記念でもあり、通常の例会と違った展開を図りたい。会発足時の沖縄に関わる映像への貢献などを加味し、宮古島で開催したい旨、提案があった。新会員で、東京センターの研究会にもたびたび参加している沖縄宮古島の牛島光弘さんから、宮古島の狩俣（ウヤガン祭という秘儀を伝える地域）の公民館で開催可能なこと。事務局の北村に「内から見る眼、外から見る眼」といった視点で沖縄の映像記録を検証できないか、という提案があったことなどが考慮された。

唯一交通費（飛行機代）が、どれだけ安くなるかと気がかりがあるが、巨純吉さんが中心になって、団体旅行を組むことを含めて旅行社にあたり、検討してもらうことになった。来年は、2月末～3月初旬にかけて、沖縄の中でも最も古俗と信仰が残る宮古島開催を目指して25周年記念大会をおこなえるよう努力するということが了承された。

会 員

新会員は以下の5名です。

桜井弘人（飯田市立美術館学芸員）〒395-0048 長野県飯田市滝の沢 5817-19

辻野理花（坂南大学講師）〒545-0011 大阪市阿倍野区昭和町 5-3-12

大久達之助（甲南大学大学院）〒567-0888 大阪府茨木市駅前 2-1-25-701

しんざとみつひろ

新 里 光 弘（ディレクター・宮古TV）〒906-0012 沖縄県平良市西里 1115-3-30 1

じん あきら

神 央（ディレクター・ヴィジュアルフォークロア）〒162-0054 新宿区戸山町 1-13-9

退会者：久保田睦子さん 長い間、ありがとうございました。

物故者

河端 繁さん 謹んでご冥福をお祈りいたします。

妻 和子さんより

「夫河端 繁は、貴会会員としてお世話になっておりましたが、平成13年11月26日、病気で死亡いたしました。ここに御連絡申し上げますと共に、生前の御厚誼にたいしまして、厚くお礼申し上げます。敬具」という、会宛の「はがき」を受け取りました。

現在、会員数71名

（報告：北村皆雄）

会 計 報 告

2001年度 日本映像民俗学の会 会計報告

2002年2月26日現在

前年度繰越残高				37,022
2001年度収入	単価	数		¥
会費(総会)	2,500	20		50,000
会費(為替振替)	2,500	14		35,000
映像民俗学No.4	1,000	4		4,000
上映会一般入場者	800	15		12,000
銀行利子				31
関西センター仮払金戻入*				50,000
小計				151,031
* 総会実施に伴い、関西センターに対し2000年度に仮払金¥50,000を支出として計上したが、精算額¥33,229を2001年度に改めて支出として計上するため、仮払金は全額戻入とした。				
2001年度支出				
23回総会 会場費				26,320
23回総会 運営雑費				6,909
事務局通信費等				14,998
送金手数料**				105
小計				48,332
** 24回総会実施に伴い、長野市在住の会員松本清人氏に仮払金¥25,000を送金。今年度、仮払金は支出として計上せず、来年度の精算とする。				
2001年度収支				102,699
2002年度繰越金				139,721

2001年度会計 大塚正之

映 像 民 俗

NO.17

発行日 2003年5月5日

ニュース・レター映像民俗編集部

日本映像民俗学の会事務局

〒160 東京都新宿区内藤町1-10

テラス小黒201

03-3352-2291 FAX 03-3352-2293

e-mail: info@vfo.co.jp

日本映像民俗学の会 東京センター 研究会 お知らせ

東京センター研究会は、以下のように4月20日(土)におこないます。一般の参加を歓迎いたします。

日時 4月20日(土) 6時15分～9時30分
場所 四谷地域センター11階 集会室4
(地下鉄丸の内線・新宿御苑下車)
電話 03-3351-3314

プログラム

1)日本のドキュメンタリーの傑作を見る

「支那事変後方記録 上海」(1937) 77分 撮影:三木 茂 編集:亀井文夫

解説:北村皆雄

日本を代表するカメラマンの三木茂と日本を代表するドキュメンタリー作家亀井文夫の編集した不朽の名作「上海」を上映いたします。

思想検閲される状況下で、映像表現はどのように可能であったか。三木茂の激戦の跡地を移していく情感あふれるカメラと亀井文夫の巧みな構成力によってなった作品。日本最初の現地同時録音ドキュメンタリー作品である。

2)アジア・ドキュメンタリーの今

「先祖の引越し」 シンガポール 華人社会

「ビデオで伝統を伝える部族」 フィリピン イフガオ族

「文化を伝える虹の橋」 台湾 タイヤル族

いずれも25分以内の作品です。

解説:牛島 巖

デスカバリーチャンネルで放映されたファートタイム・フィルムメーカーズ受賞作特集の3本です。特に説明を必要としない解りやすい作品です。アジアのテレビドキュメンタリーの現状をしめす作品といえましょう。

「アジアの若手映画監督たちが、アジアの国々に古くから伝わる伝統や文化と、近代文明の衝突を撮り下ろした。西洋文明からの強い影響を受け、便利になった反面、失われつつあるのは何か? 先住民民族や山奥の山村に入り込み、若手らしいフレッシュな視線で問題点を浮き彫りにした作品を紹介」(以上 ビデオ内容紹介から)